

第三章 アユ村の宗教と祭祀

北タイを中心としたこれまでのラフ族研究から、ラフ族宗教の特徴として、至高神グシャとともに数々の精霊の存在を信じ、両者に対して儀礼的に働きかけるという宗教的な二元性が挙げられている。ウォーカーは、ラフ族の間で見られるメシア運動の周期的な出現の中に、村落司祭が村落を超えるカリスマ指導者へと成長するという過程を指摘している (Walker 1974)。片岡は、複数の北タイ・ラフ族村落の調査から、ラフ族宗教の中に至高神グシャ崇拝と精霊祭祀への退行というふたつの方向性があることを指摘し、ラフ族宗教の動態は至高神崇拝と精霊祭祀というふたつの志向性の間の振り子運動だと述べている (片岡 2007)。西本は、北タイ・赤ラフ族の調査から、彼らの宗教が至高神崇拝と精霊祭祀の間の振り子運動という動きとともに、長期的には精霊祭祀から至高神崇拝へと漸次的に重心を移してきたことを指摘している (西本 2008、2009b)。

至高神崇拝と精霊祭祀の両者の存在および両方の志向性をめぐる宗教的な動態の他に、ラフ族宗教の特徴としては、言語化された教えや形而上学的な問題よりも、先祖の時代から継承されてきたと彼らが考えるところの諸祭祀を実践しなければならないという意味での信仰に対する実践の優越性が挙げられる。信仰に対する実践の優越性という特徴は、伝統社会の宗教の多くに見られるものであるが、ラフ族宗教の場合には、ラフ族の住民自身が、信仰の対象や教義の内容よりも、例えば祭祀の際に蠟燭を燃やすか否かといった祭祀のやり方の類似と違いという点から、諸集団の宗教的な帰属や親和性を判断するという特徴をもつ (西本 2009a)。そして、信仰の内容よりも実践の流儀によって宗教的な帰属を判断するラフ族の態度は、同様に蠟燭を燃やすゆえに、タイ系仏教とラフ族宗教とは、同じかと言われれば同じだとするのである (西本 2009a)。

本章では、至高神崇拝と精霊祭祀の二元性および信仰に対する実践の優越性という点を考慮に入れながら、アユ村における宗教と祭祀について報告する。残念ながら筆者の滞在調査中には、大きな祭祀や儀礼が行われることはなかったため、以下の記述は直接観察でなく、主に複数の住民たちからの聞き取りに依拠している。

3.1 祭祀の対象

筆者が住民たちのおこなう祭祀について尋ねても、祭祀の対象が何か、いかなる存在かということよりも、いかに祭祀をおこなうかということについて語られることがほとんどだった。しかし、複数の住民と話して出てきた祭祀の対象は、グシャ (神) とネ (精霊) の二種類であった。このうちネは、グシャよりも住民の生活に直接的に関わる存在である。

3.1.1 グシャ（神）

ラフ語の「グシャ」(G'ui. sha) は、「神」と訳しうる言葉であるが、「グシャ」観念は、外部観察者には時に捉えにくい観念である。一般にラフ人に「グシャ」について具体的な説明を求めても、曖昧で断片的で、外部観察者にとっては矛盾しているようにみえる答えが返ってきて、はっきりとしないことが多い。

「グシャ」がいかなる存在かについての曖昧な言説は、アユ村民にも同様に見られた。村人自身が「グシャ」に自発的に言及することはまれである。村人が「グシャ」に言及するとすれば、例えば後述する儀礼のいくつかについての説明のように、崇拝の対象として、短く言及されるような場面であった。そこでは、ラフ族住民は「グシャ」を崇拝することは当然のこととしており、「グシャ」がいかなる存在かという問題は、重要視されていない。このほかに村人が「グシャ」について言及したのは、以下に挙げるような場面であった。

事例1 2008年9月1日午後遅く、筆者はある家の庭に座っていた。家の主人は豚のえさにするバナナの幹をスライスしていた。そこにふたりの酔っ払った男がやって来て、小椅子を取って、筆者の横に座った。酔っ払いのひとりとは筆者に向かって、「あんたがこうして遠くの国まで来ることができるのも、グシャがそうしてくれるからだ」と語った。

この言葉は、別の機会に聞いた、「あんたがこうして遠くの国まで来られるのも、功德が大きいからだ (aw. bon da. ui. yo.)」とほとんど同じ調子の言葉である。「グシャ」は日常生活からは遠い、抽象的で曖昧な存在であるが、世界の全てのことを最終的に統括する存在である。また「グシャ」が「功德」(aw. bon)と同様な用法で使われることがあることから、具体的な人格的存在と言うよりも、抽象的で曖昧な福德の源のようなものとして捉えられているとも言えるだろう。

3.1.2 ネ（精霊）

祭祀のもうひとつの対象は数々のネ (ne、精霊) である。グシャが一元的な善として捉えられるのに対して、ネは両義的で、しばしば人間の予想に反して、人間に「咬みつき」(che. ve)、災厄をもたらす両義的な存在である。ネにも様々な種類があり、特定の場所の守護主とされるもの（例えば、家のネ yeh. ne、川のネ i'ka' ne など）、一元的な悪で災いのみをもたらすもの（メ meh. など）等にさらに分けることも出来る。いずれのネも人間に対して災厄をもたらすことがあるという意味で、否定的に影響



写真 58 魔除けの首かけをつけた子供

してくる可能性があるために生活で無視できない存在である。大部分のラフ人がそうであると考えられるが、アユ村の住民もまた、ネが存在することを当然視している。そして、様々なネが人間に及ぼす災厄に対処する種々の儀礼を発達させている。災厄に対しては、それを受けた後に対処する場合もあれば、産前婦や乳幼児のように脆弱な状態にある人々のために、予防的におこなうこともある。

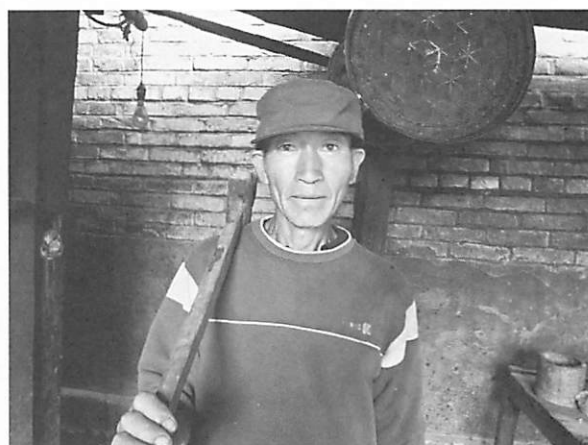


写真 59 アユ村の「焼香者」 普段は普通の農民である

3.2 共同体の祭祀

アユ村で見られる宗教と祭祀は、共同体および個々人の安寧と繁栄とに関わる。共同体の祭祀としては、祭祀の場所として村の上方に設けられた「線香を燃やす場所（焼香場）」（sha tu⁻ kui₁）および村落司祭として「線香を燃やす者（焼香者）」（sha tu⁻ pa₁）が中心となっている。

「焼香者」は主に村の祭祀を司り、村の上方に設けられた「焼香場」に「登って」（ta⁻e ve）焼香し、村の安寧を祈る役目を担う。

アユ村の「焼香場」は、村の東側上方の林となっている斜面に設けられている³⁰。そこには、木と竹と茅（zuh₁）によって祠が作られていて、祠の中の棚の上には水を入れて奉獻するための竹筒ふたつがある。祭壇の下方には、線香が燃やされた跡が残っている。

村の「焼香場」を呼ぶ決まった呼称はない。村人は、「あそこに行って、焼香する」（O⁻ k'ai leh sha tu⁻ pi⁻ ve）などと話すが、その場所を何と呼ぶかと聞くと、「焼香する場所」（sha tu⁻ kui₁）、



写真 60 村の「焼香所」

³⁰ 高度計付時計で測った海拔高度は 1,280m で、村の中心広場（1,220m）から約 60m 高い場所にある。60m は大きすぎる数字なので、誤差が含まれると考えられる。

「sheu, yeh」(「神の祠」か?)、「山神の祠」(shan[~] sheun, yeh)と様々に答える。最初の呼称は、固有名詞というよりは、形容的な説明語である。このうち漢語を交えた「shan[~] sheu, yeh」(山神の祠)の呼称は、調査の初日に「書記」が用いたのみで、他の村人は「焼香場」(sha tu⁻ kui)と呼び、グシャ(神)に対して祭祀するのだと語っていた。

年中の祭日には、各家が「焼香者」に一元ずつをあげ、ごちそうを作り、山神の祠に登るという(「書記」による)。

「焼香者」によれば、正月祭や、村に病人があるときに、村の「焼香場」に登ってゆく。正月祭には、2回登るが、「焼香者」ひとりで行く。「餅を奉獻する」(aw, hp[~]fuh, tan[~] ve)のためである。大きな餅2つ(aw, hp[~]fuh, lon⁻ 2 po[^])、小さな餅を8つ、合わせて10個の餅を奉獻し、線香を燃やす(sha tu⁻ ve)。そして、「一年に一度、餅を捧げにやってきま

した」(te[~] hk[^]aw, ve te[~] paw[^] aw, hp[~]fuh[~] tan[~] la, ve k'o[^] pi[~] ve)と唱え、村全体の安寧を祈る言葉が続ける。何に対して祈るのかという質問に、「焼香者」は「グシャに」と答えたが、どんなグシャか、名前はなんというのかという質問については、「グシャということだけ知っている」という答えだった。

「焼香者」によれば、「カシュ(hk[^]a[^] sheu、村の「焼香場」のこと)には、女は行くことはできない。50歳を過ぎた女だけしか行けない(つまり、生理のある女は行けない)」という。また、別の村人は、村の「焼香場」一帯では、畑をやってはいけないと言った。実際に登ってみても、焼香所付近は藪になっていて、畑として拓かれてはいない³¹。

アユ村の隣村のムヌ村にも、「焼香場」(sha tu⁻ kui)がある。ラフ族の祭祀の場所なので、行政村ごとではなく、自然村単位で「焼香場」があるのである。



写真 61 村の「焼香所」の内部



写真 62 村の「焼香所」の祭壇下にあった焼香の跡

³¹ アユ村の「焼香場」は、北タイ・赤ラフ族がかつて持っていた「カウパー」(hk[^]a[^] u⁻ pa)に相当する祭祀場所だと言える(西本 2008, 2009)。「カウパー」付近の山林には禁忌が多く、畑を拓いたりすることはできない。一方で、「カウパー」は一般に偉大な山の精霊(hk[^]aw ne[~] lon)を祀っていたとされるのに対して、アユ村の「焼香場」で祭祀の対象となっているのはグシャである。

3.3 家の祭祀

各家の入口を入って正面には、「線香を燃やす場所」(sha tũ kui、焼香場)があり、家の祭祀の中心場となっている。その部屋には、テレビやソファが置かれ、居間の機能を果たしている。その部屋の両側は、入口が別になっていたり、居間からカーテンで仕切られていたりするが、両親と子供それぞれの寝室となっていることが多い。より簡素な、食事を作ったり、食事を摂ったりする家は、たいがい母屋とは別に作られている。

「焼香場」の形態は、家によって少し異なるが、多くは床に直接瓶が置かれて、そこに線香が挿されている簡単なものである。線香を挿す瓶の両側に、竹の筒が置かれていることもある。正月には、この竹の筒のひとつにお茶を入れ、もうひとつに水を入れて捧げる(tañ ve)するのだという(しない人も多い)³²。同時に、正月に捧げられた松の枝が8月(新暦)の今でも残っている家もあった。ある貧しい家の「焼香場」は、床に線香を挿す瓶が置かれた上方に木の棚が作られ、その上に水を捧げるために用いるらしい容器が2つ置かれていた。観察した限りでは、家の「焼香場」の簡素・複雑さは、儀礼的な職能には関係ないらしく、村の「焼香者」(sha tũ pa_)やモーパ



写真 63 「書記」の家の「焼香所」

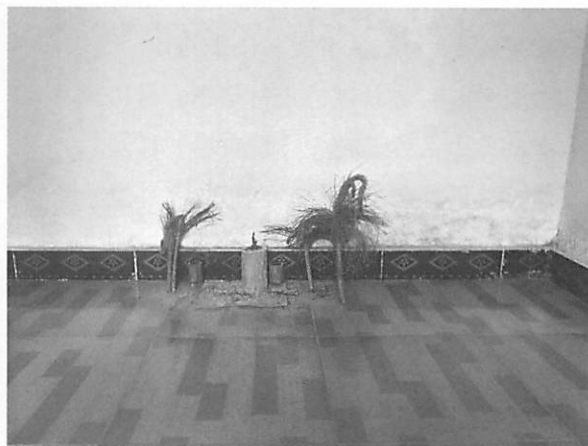


写真 64 「焼香者」の家の「焼香所」



写真 65 村のある貧しい家の「焼香所」

³² 正月に家の「焼香場」で、竹の筒によって何を奉獻するかについての村人の答えはさまざまである。竹の筒を置いている者は、水を捧げる、お茶を捧げる、両方を捧げるなどと答えた。一方で、竹の筒を置いていない者もいた。正月には家の「焼香場」で線香を燃やすことは共通しているが、その他の行為は付随的で、多様性が見られる。

(maw⁻ pa⁻、呪医) の家の「焼香場」は簡単なものだった。

家の「焼香場」で、いつ線香を燃やすのかと聞くと、たいていは「正月祭のときだけ(線香を)燃やす」(Hk'aw⁻ hta⁻ ceh⁻ tu⁻ ve yo⁻) という答えが返ってくる。正月祭(hk'aw⁻ ca⁻ ve、字義通りには「歳を食べる」)の間はずっと線香が燃やされつづけているという。

しかし、よく聞いてみると、家の成員や家畜が病気だったり、異常な行動を示したりすると、家の「焼香場」で焼香されるという。2008年8月30日(土)の朝10時頃、筆者は58歳ぐらいの元カシェと話していた時に、元カシェの家人がやって来て、「豚が病気だ」(va⁻ ma⁻ cheh⁻ sha)だと知らせた。元カシェは、線香(sha k'aw)を買って、家の「焼香場」で焼香するようと言った。

この時同席していた、村の「焼香者」(sha tu⁻ pa⁻)は、これでよくならなければ、自分が村の「焼香場」(sha tu⁻ kui⁻, hk'a⁻ sheu⁻)に「登って行って」(ta⁻ e ve)、そこで焼香することになると言った。その場合に線香は、解決すべき問題を抱える家の者が用意する。「焼香者」ひとりだけで村の「焼香場」へ登り、線香のみを奉獻する(tan⁻ ve)するという。

3.4 モーパ (呪医)

モーパ(maw⁻ pa⁻、ne⁻ te hpa⁻とも呼ばれる、呪医)は、個人的にクライアントの求めに応じて、病気や災厄の解決を儀礼的に試みる者で、薬草治療もおこなう。森で集められる材料から作られる生薬は、漢語借用で「チョーヨー」(chaw⁻ yaw⁻、「草薬」cao3 yao4より)または「森の薬」(heh pui⁻ hk'aw



写真 66 アユ村のモーパと孫

na⁻ tsuh⁻) と呼ばれる。「焼香者」は村にひとりいるべきいわば常設職であるが、モーパは、技能があると認められれば村に複数存在することもあり、いないこともある。例えば、アユ村にはモーパがひとりいるが、隣のムヌ村にはいない。かつて集団化の時代にモーパは「老迷信」として批判され攻撃された。そのためか、改革開放政策とともに民族文化振興の時代となったが、筆者が見た限りでは、現在でもモーパのいない村の方がいる村よりも多い。

3.5 実践の流儀

北タイの赤ラフ族は、人々の宗教的な帰属を、信仰の対象や内容よりも、その人たちが行っている宗教・祭祀の実践のやり方から判断する(西本 2009)。北タイにおいて、こ

れは、キリスト教徒のラフ集団についてもある程度当てはまる。アユ村を含む雲南のラフ族もまた、信仰よりも行為から、人々の宗教的な帰属を判断するようである。アユ村の主教・祭司的な実践においては、核となる定型化された行為がある。ひとつは「線香を燃やす」(sha tu⁻ ve) ことであり、もうひとつは「糸を結ぶ」(a⁻ mvuh hkehn tcuh⁻ ve) である。

3.5.1 「線香を燃やす」(sha k'aw tu⁻ ve、焼香)

アユ村の住民はみずから「線香を燃やす者」(sha tu⁻ pa⁻、焼香者) だと言う。何人かの村人に、あなたたちは焼香・点蠟するかと聞くと、「焼香するが、点蠟はしない」、「蠟燭は、結婚式のときにだけ燃やす」(Peh⁻ leh⁻, aw⁻ hpaw⁻ aw⁻ mi⁻ ma heu⁻ da⁻ hta⁻ ceh⁻ tu⁻ ve) という答えが返ってきた。黒ラフ族のこの村の儀礼的な実践の中心は、焼香 (sha tu⁻ ve) で、点蠟 (peh⁻ tu⁻ ve) ではない³³。

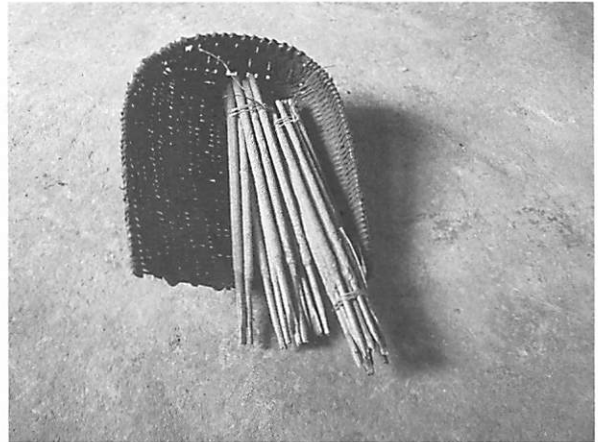


写真 67 手製の線香

祭祀で燃やされる線香は、手製のもののようである。村民の中には、森で採った材料で線香を作っている者がいる。そして、村内の雑貨店では、線香が売られている（一束 8 本ほどで 1 元）³⁴。ある線香の作り手は、村内には「線香を燃やさない者もいる（つまり、祭祀に熱心でない者も多い）」(sha ma⁻ tu⁻ pa⁻ ka⁻ ma⁻ ve) と語ったが、祭祀の際には、「線香を燃やすこと」(sha tu⁻ ve) がアユ村民の実践の中心であることには変わらない。

また「書記」は「蠟燭は、先祖の時代に燃やしていた (peh⁻ leh⁻, chaw maw⁻ co-e ceh⁻ tu⁻ ve)、今は結婚式の時にだけ燃やす」と語った。筆者が調査した北タイの赤ラフ族の中には、かつては焼香していたが（時代が変わり）今は点蠟すると言う者がいる。アユ村の住民と北タイの赤ラフ族とでは、変化の方向は逆だがいずれも、時代毎に用いる流儀（オリ、aw⁻ li⁻）が変化してきたという認識をもっている点で共通している。

³³ 筆者が調査した北タイのラフニ（赤ラフ）族は逆で、「蠟燭を燃やす者」(peh⁻ tu⁻ pa⁻) を自称し、蠟燭を燃やすが、線香は燃やさない。

³⁴ 北タイの赤ラフの間では、特別な儀礼の際には、既成の蠟燭でなく、蜜蠟から自ら糸に巻いた蠟燭が使われる。北タイ人が作って売っている蠟燭よりも、ラフが自ら作ったものの方が威力があるという観念があるようである。手製と既成の線香の違いについてのアユ村民の考えについては不明であるが、祭壇の線香の残りを見た限りでは、手製の線香のみが用いられているようである。

3.5.2 「糸を結ぶ」(a[˥] mvuh hkeh tcuh[˥] ve)

「糸を結ぶ」行為は、それ自体としておこなわれるほかに、正月祭における年長者への表敬、招魂儀礼の最終過程、「功德をなす」儀礼の最終過程など、さまざまな儀礼にそれらの一過程として含まれている。儀礼によって巻かれるべき糸の色などにバリエーションがあることもあるが、基本的には、ひとりの人間（主に年長者や立場が上の者）が別の人間の手首などに糸を結んであげるといふ行為である。なぜ糸を結ぶのかという質問に対する村人の答えは単に、「そうすれ健康快適になるから」(cheh[˥] sha yo[˥]) というものである。糸を巻いてあげるとは、相手が「功德にあふれ」(aw[˥] bon ui[˥]) 無病息災でいれるようにと祝福を与える行為である³⁵。

「糸を結ぶ」といふ行為は、それ自体が儀礼として、また別の儀礼の一過程として観察されるが、アユ村の人々の語りの中では、「糸を結ぶ」のは正月だけで、普段はしないと言われることが多かった。短期の滞在調査のために実際はどうか分からないが、筆者が調査した北タイの赤ラフ族が普段でも心身不調の場合や、危機に遭う可能性がある場合に頻繁に「糸を結ぶ」のに比べると、アユ村では正月以外で「糸を結ぶ」ことは少ないように見えた。

しかし、筆者が「糸を結ぶ」ことについて質問したりしていたこともあってか、村を出発する朝に「書記」の義母(80歳)は筆者のために「糸を結んでくれた」。その朝、彼女は「糸を結んであげるから」と筆者を母屋に呼んだ。そして、次のような内容の言葉を唱えながら、筆者の右手首に糸を結んだ。「功德大きくあれ。世界の各所を司るものの加護あれ。病気や不調のないように。力にあふれてあるように」(Aw[˥] bon ui[˥], mvuh[˥] mi[˥] taw[˥] mvuh[˥] mi[˥] sheh hpa[˥] hk'a deh[˥] gaw[˥] Ma[˥] na[˥]).



写真 68 筆者の手首に糸を巻いてくれる「書記」の義母
白い糸はアユ村訪問前にタイのラフ人が巻いてくれたもの。アユ村の老婆が巻いてくれた糸は2条程だった。

³⁵ 北タイの赤ラフ族においてもまた、「糸を結ぶ」ことは彼らの宗教・儀礼的な実践の中心のひとつをなしている。これは、キリスト教徒ラフに対する見方において同様の結果を生んでいる。北タイの赤ラフもアユ村のラフナも同様に、自分たちは「糸を結ぶ」一方で、キリスト教徒ラフは結ばず、代わりに「握手する」(la[˥] sheh ca[˥] da[˥] ve) と言う。例えば両集団は同様に、自分たちもキリスト教徒ラフも「功德をなす」(bon te ve) という同様の儀礼的行為をおこなうが、自分たちと違ってキリスト教徒は、「糸を結ぶ」代わりに「握手する」と言う。行為のかたちは異なれ、「糸を結ぶ」ことも「握手すること」も、豚をつぶしてご馳走してくれたホストに対して、それらの行為によって、ホストの安寧のために祝福することでは同じだという理解がある。

ma˘ g'aw, caw, pi˘. Aw, g'a˘ ui, sha kui, caw, pi˘)。

3.6 戒日

ラフの多くにおいては、ラフの暦の月に数日の「戒日」(シニ、shin˘ nyi)があり、野良仕事を休み、遠出せず、村で静かに過ごすべき日とされている。戒日に野良仕事をするのは罪(ven˘ ba˘)である。北タイの赤ラフにおいては、満月と新月(ha pa taw., ha pa che.)が戒日で、ラフシェレーでは、日ごとに付けられた十二支の動物名のうち、「虎の日」(la˘ nyi)を戒日にしている³⁶。

アユ村では、戒日はグレゴリオ暦の日曜日で、7日に一度巡ってくる。キリスト教徒(bon ya˘)のラフと異なり、7日に一度のこのシニには、野良仕事は休んでも休まなくてもよいと村の「書記」は語った。これに対して、雲南でも北タイでも、キリスト教徒ラフの戒日は、安息日すべき日であり、仕事をするのは罪となる。「彼らは戒日には仕事を休んで、教会に(礼拝に)行くが、我々はそうでない」とアユ村の村人たちは語った。このような仕事を避けて安息すべき日であり、そうしないと災いにつながる可能性があるという戒日の観念は、北タイの赤ラフ族にも見られる。アユ村での「戒日」は、これらと異なり、仕事は休んでも休まなくてもよく、戒日に仕事をするのが罪となるという観念はないようである³⁷。このような安息の倫理的な強制のないラフ村は、雲南ではアユ村の他にも見られる。筆者が2006年に訪ねた勐海県勐阿郷龍竹棚村の「代表」(男性、35歳)は、「戒日(shin˘ nyi)はない。働かない日はない(kan˘ ma˘ te ve te˘ nyi ma˘ caw.)」と語った。

月中の戒日の観念があまり見られないアユ村であるが、日曜日には通常の日とは違った、はなやいだ雰囲気もある。日曜日には朝からバイクや「トラジ」(トラクターエンジンによる乗用車)に乗って、東崗(郷の中心地)や勐朗(県の中心地)の市場へ出かけてゆく人も多い。2008年8月31日に村人たちが東崗へ出かけていった時の様子については、「マーケット」の項を参照されたい。

3.7 年中行事

アユ村の年中行事については、先に表4で示した通りである。ラフ族が昔からおこなってきた年中祭祀は、農業の主要過程に対応し、年間の時間のリズムを作り出している。それらの伝統行事に加えて、政府の民族文化振興政策によって、比較的最近始まった行事も

³⁶ ジョーンズは、彼が調査したラフ・シェレー(自称である「黒ラフ」Black Lahuとして言及されている)が、「虎日」には、軽い仕事を除いて労働を回避すると報告している(Jones 1967: 35)。

³⁷ 月中の戒日がない一方で、アユ村では、農曆の1月と2月だけは、満月と新月(ha pa taw., ha pa che, ve)の日は安息する(cheh˘ ve)という。

あるが、それらは主に新暦で行われる。表5は、アユ村を例に取り、雲南のラフ族と中国漢族の年中行事を比較したものである。

表5 アユ村ラフ族と漢族の年中行事比較表

月	ラフ族の年中行事	漢族の年中行事
正月	一日より Hk'aw, ca' ve (正月祭)	一日より十五日まで 春節
	-	立春 (夏至と春分の中間、新暦2月4日前後)
	-	一五日 元宵節 (正月一五・上元節・灯節)
二月	Tu, pfuh gu ve (墓を修繕する)	清明節 (春分より15日目)
三月	-	-
四月	-	-
五月	-	五日 端午節
六月	二十四日 A kui' tu' ve (松を燃やす)	-
七月	一五日 Chaw suh aw, teh ve (死者にご飯を供える)	一五日 中元節・七月半・盂蘭盆節
八月	一五日 Pa, ye, ha pa ya, k'aw hk'aw, gu ve (8月の道路補修)	一五日 中秋節・八月十五・八月節・仲秋
九月	-	九日 重陽節
十月	(Aw, hpaw mi' ma heu' da, ve [結婚式])	一日 寒衣節
十一月	-	冬至 冬至・冬節 (新暦十二月二二日ごろ)
十二月	-	八日 臘八・臘八節
	-	二三日 祭竈
	末日 新年祭の餅を搗く	末日 除夕

(月は農暦。ラフ族の年中行事については「カシェ」夫妻ほかの村人への聞き取りによる。漢族の年中行事は〔曾・西澤・瀬川編 1995: 182-183〕にもとづく)

3.7.1 新年祭

ラフ族の新年祭は、「年を食べる」(hk'aw, ca' ve) と呼ばれる。アユ村において新年祭は、漢族 (Heh' Pa_) と同時期に行われるが、新年は「女の年」(ya' mi' kai' hk'aw_) 4日と「男の年」(haw' hk'a' pa, hk'aw_) 4日(「3日」という人もいた) からなり、「女の年」と「男の年」の間は、3日間「間を置く」(aw, ka, le taw, ve) という³⁸。正月祭の間は、家の「焼香場」で線香がずっと点されつづける。

「年を食べる」は次のように進む。まず、餅を搗く日 (aw, hpfuh, te, ve aw, nyi) がある。この日は正月に含まれない³⁹。翌日は「新年」(hk'aw, suh) である。

³⁸ 北タイの赤ラフ族は、農暦正月を中心とするものの、月の満ち欠けや正月祭を始める日の吉凶を勘案して日時を決めるために、村ごとで正月祭の日時が異なる。早い村では新暦1月に正月祭を始め、遅いところでは新暦3月に正月祭をおこなう。一方、筆者の見る限り、雲南の非キリスト教徒のラフ族は、農暦正月に従って正月祭をおこなっているようである。

³⁹ 他村では餅を搗く日を「旧年」(hk'aw, pi_) と呼ぶ人もいるが、話を聞いたアユ村の「カシェ」夫人は「そうは呼ばない。まだ新年に入っていない (hk'aw, ma' lo, -e she_)」と答えた。

表6 アユ村の新年祭の過程

日	日の呼称	活動
-	なし	「餅を搗く」(aw, hpfu, te_ ve)
1	新年 (hk'aw, suh~)	「何もしない」(te, chi~ ma~ te)。
2	新年二日目 (hk'aw, suh~ nyi~ nyi)	「老人に糸を結んでもらう」 「先祖にご飯を供える」
3	新年三日目 (hk'aw, suh~ sheh~ nyi)	「大阿永村 ⁴⁰ に踊りにゆく」(k'a_ hk'eu~-e ve)
4	新年四日目 (hk'aw, suh~ aw~ nyi)	「南啥村 ⁴¹ に踊りにゆく」(k'a_ hk'eu~-e ve)
5	間 (aw, ka_ le)	「野良仕事に行く」(heh te k'ai ve)
6		
7		
-	なし	「餅を搗く」(aw, hpfu, te_ ve)
8	新年 (hk'aw, suh~)	他村の人びとが来る。 村内でバスケットボール (baw~ shi_ daw~ ve) で競う。 踊る (k'a_ hk'eu~ ve)
9	新年二日目 (hk'aw, suh~ nyi~ nyi)	勐朗近くの村へ出かける。 バスケットボールで競う。 踊る (k'a_ hk'eu~ ve)
10	新年三日目 (hk'aw, suh~ sheh~ nyi)	別の村へ出かける。 バスケットボールで競う。 踊る (k'a_ hk'eu~ ve)

(「カシェ」夫妻ほか複数の住人からの聞き取りから作成)

「女の年」の「新年二日目」の「老人に糸を結んでもらう」(chaw maw~ geh a~ mvuh hkeh hpeh ve⁴²) は早朝におこなわれる。酒の小杯 (zuh, te~ kaw~) ⁴³、餅2個 (aw, hpfu, nyi~ po)、豚肉一切れ (va, sha_ te~ pi~) を用意し、それらを入れた容器を、家の「焼香場」(sha tu~ kui_) の横の台の上に置く。水にタオルを浸して、老人 (chaw maw~) の顔や手を洗ってあげる (chaw maw~ i~ ka~ tsuh~ pi~ ve) 人もいる⁴⁴。その後で、年長者は敬意を表しにや

⁴⁰ アユ村とともに行政村を構成する村のひとつである。

⁴¹ アユ村とともに行政村を構成する村のひとつである。

⁴² アムケ (a~ mvuh hkeh) については、「着ける」(tcuh~ ve) や「結ぶ」(hpeh ve) などの動詞が用いられる。

⁴³ 北タイの赤ラフ族の間では、儀礼の際に酒を供えることは忌避される。彼らによると、至高神グシャの基本的教えのひとつは、酒を飲んではいけないというものであり（実際には村人の飲酒は珍しくないのだが）、グシャを祀る神殿 (haw~ yeh_) には、肉とともに、酒の持ち込みが禁止されている。グシャ観念の強弱と酒の儀礼的使用との関係は、興味深いテーマのひとつである。

⁴⁴ タオルを用いるのであれ、用いないのであれ、水で手などを洗ってあげる行為は、「水で洗ってあげる」(i~ ka~ tsuh~ pi~ ve) と呼ばれる。「水で洗ってあげる」は、相手に敬意を示す儀礼的な行為で、筆者が調査した北タイの赤ラフ族でも、様々な儀礼において見られる。例えば、北タイの赤ラフ族の村人が心身の不調のためにトボ（村落司祭）やシャーマンに招魂や罪の浄化儀礼を頼む場合には、儀礼の前にクライアントが儀礼施行者の手を水で洗って敬意を示す。このように、通常は目下の者が目上の者の手を洗うが、足も洗ってやることでより大きな敬意を示すこともある。さらに、かつてラフは相手の身体全体に水を掛けて洗ってやることも行っていた（ベルナツィーク 1968:243-244）。これに対して水で洗ってもらった者は返礼に、「糸」(a~ mvuh hkeh) を手首に結んでやることなどで、目下の者に祝福を与える。

って来た人びとに「糸を結んでくれる」(a^ˉ mvuh hkeh hpeh la. ve)。この儀礼的行為は、「老人から礼をもらう」(chaw maw^ˉ geh aw. li^ˉ yu. ve) と呼ばれる。

同じ日に村の一部の人は、「老人にご飯を供える」(chaw maw^ˉ aw. teh ve)。竹で編んだ箕 (ha ma k'o.) に、鶏料理、ご飯、酒、煙草などを入れて、戸口（家の内側の方）に置く。これらのものを入れた箕は、「老人」(chaw maw^ˉ) つまり「死者」(chaw suh) の数だけ用意する。「死者」とは、世帯主とその妻の両親を指す⁴⁵。このようにして「死者」を儀礼的に饗応するのである。

新年三日目以降は、ひとつの村を超えた行事が連続する。アユ村とともに行政村を構成する近隣村落へそれぞれ一日ずつ出かけて、新年の踊りを踊るという。

その後、新年祭は 3 日間休止となり、このあいだ村人たちは野良仕事に出かける⁴⁶。その後「男の年」が始まる前日に再び餅を搗く。

後半の「男の年」には、共同体の祭祀というよりも、行政的な文化行事という性格が強くなる。アユ村に人々は、他村からの訪問を受け、また県都近くの村まで出かけてゆくが、そこで行われるのは、正月の踊りとバスケットボールである。上述の通り、行政村には「村公所」があり、バスケットボールコートが備えられている。

3.7.2 墓を修繕する (tu. pfuh gu ve)

漢族の清明節にあたり、『瀾滄拉祜族自治県概況』(2007: 23) にはそのまま「清明節」として記載されている。漢語を交えて「ui^ˉ ye. gu ve」(ui^ˉ ye. は漢語の「二月」で「二月に修繕する」という意味である) と呼ぶ。「書記」の義母（自称 80 歳）による説明は次の通りである。

墓に行き墓の修繕をする。豚と鶏とをつぶして、墓場 (chaw tu. kui.) で食べる (ca^ˉ ve)。家に戻ってからもう一度残りを食べる。モーパが言葉を唱える (aw. hkaw^ˉ hkao. pi^ˉ ve)。家人とモーパの両方が線香を点す。蠟燭は点さない。蠟燭は結婚の時にだけ点すものだ (Peh^ˉ ma^ˉ tu^ˉ. Peh. leh. aw. hpaw^ˉ aw. mi^ˉ ma heu^ˉ da. hta^ˉ ceh. ti^ˉ tu^ˉ ve

⁴⁵ 北タイの赤ラフ族における「死者にご飯を食べさせる」と呼ばれる同様の儀礼においても、世帯主夫婦の死んだ親のみが饗応の対象となる（西本 2008、2009）。Chaw suh は、字義通りには「死者」であるが、亡くなった親（片方でも両方でも）を指す。儀礼の対象は死んだ親のみで、それより上の世代は「ご飯を食べさせ」られることはない。親より上の世代は、名を忘れられて「祖先霊」として人括りにされるのではなく、単に忘れられ祭祀の対象とならない。北タイの赤ラフ族が、この「死者にご飯を食べさせる」場合を除いて、祖先祭祀に関わることはないことは特徴的である。雲南のラフ族の死者供養においても、同様に上の一世代のみを対象とするという特徴があるようで、中国人類学者の杜杉杉も、「親崇拜の一形態―ある人の親たちのみに向けられる特異な形の祖先崇拜」(Du 1999: 25) を報告している。

⁴⁶ 北タイの赤ラフ族もまた、新年祭に「間」(aw. ka. le) を入れるが、基本的に一日だけで、後半の「男の年」が始まる日の吉凶によって、「間」が二日間になることもあるという具合である。

yo.)。墓場には村全体で行ったり、各家で行ったりする。水牛や牛はつぶさない。酒や肉料理で賑やかに楽しく過ごす。

3.7.3 三八婦女節

3月8日の国際婦人デーは、中国で「三八婦女節」として祝日となっている。アユ村の「書記」に年中行事について聞いていた時に、三八婦女節が「女性の正月」(ya[˥] mi[˥] ve hk'aw[˥])として挙げられた。「書記」によれば、昔はなかった祭日である。かつて日本人の客数人がアユ村にやってきたことがあったが、ちょうどこの日だったので、婦人たちがラフの衣装を着て踊る (paweh[˥] te ve) のを見ることができたという。三八婦女節には何をするのかという筆者の質問に対しての答えは、「この日には、女性は何も仕事をせず、男が代わってすべてやる」というものであった。「カシェ」夫妻によると、三八婦女節 (Sa[˥] Pa Hu Li Jeh[˥] と呼んだ) は、1997年から始まった新しい祭りで、この日には村の女性全員が、男性の村人3-4人を連れて森に行き、食事し、酒を飲んで楽しく騒いで過ごすという。男3-4人は、料理人として連れてゆくのだという。また村で踊りを踊る (paweh[˥] te ve)。この日は女性は全ての仕事から解放され、男性が全てを引き受けるのだという。

3.7.4 阿朋阿龍日

「阿朋阿龍日」の「阿朋」とは、ラフ語で瓢箪を意味する a[˥] hpo[˥] の漢語表記である。かつて諸民族が瓢箪の中から生れたという伝説から、瓢箪はラフ族の象徴として用いられ、例えば瀾滄県政府にも、大きな瓢箪のシンボルが作られている。

「書記」の理解によると、阿朋阿龍日は「昔からあった」祭りで、4月15日に瀾滄（勐朗）で大々的に催されるという。「カシェ」夫人によれば、その日には勐朗に出かけて行って、正月の踊りを踊る (k'a[˥] hk'e[˥] paweh[˥] te ve)、出来て10年ぐらいの新しい祭りである。実際には、1992年に瀾滄政府が毎年農曆10月15日から17日に開催することを決めた催しで、2006年からは新暦4月8-10日に開催日が変えられた（『瀾滄拉祜族自治県概況』2007：23-24）。

3.7.5 松を燃やす (a kui[˥] tu[˥] ve)

農曆の6月24日におこなわれる。ラフ語で「松を燃やす」(a kui[˥] tu[˥] ve) と呼ばれ、漢語では「火把節」と呼ばれる。「書記」の義母（80歳）によると、この日は家の「焼香場」(sha tu[˥] kui[˥]) で線香を燃やし (sha tu[˥] ve)、豚や鶏をつぶして食べる。モーパ（呪医）でなくとも、出来る人が司式するという。

3.7.6 死者にご飯を供える

農曆7月15日頃に行われ、ラフ語では chaw suh aw[˥] teh ve（死者にご飯を供える）や chaw maw[˥] ca[˥] ve（老人【この場合は先祖の意味】に食べさせる）などと呼ばれる。『瀾

滄拉祜族自治県概況』(2007:24)では、農曆2月8日と並んで、農曆七月におこなわれる「祭祖節」(祖先供養日)と記されている。

3.7.7 Pa_ye_ (八月)

「書記」の義母(80歳)によれば、8月には「山神の祠」(shanˊ sheu_yeh_、村の「焼香場」のこと)で線香を燃やす(sha tuˊ ve)。長老(chaw mawˊ)がひとりで「山神の祠」まで行って、線香を燃やすが、祠には何も奉獻しない(maˊ tanˊ)という。漢族の中秋節との関わりは不明である。

当村の「焼香者」によれば、8月15日には「八月の道路修繕」(pa_ye_ ha pa ya_ k'aw hk'aw_ gu ve)がおこなわれる。村の下方の省道までの道を、この日に人びとが出て修繕する。そして省道傍に「ca_law_yeh_」(早生米の祠)を作って、奉獻する。その意味を聞くと、「グシャが食べに来る」(G'ui_ sha caˊ laˊ ve)という答えが返ってきた⁴⁷。「焼香者」は、線香を燃やし、言葉を唱える(sha k'aw tuˊ ve, aw_ hkawˊ yaw piˊ ve)という。この「八月の道路修繕」は、漢族や政府との関係が大きくなった後の時代にできた儀礼のように見えるが、「焼香者」は「ラフは昔からやっていた」と言った。この儀礼は「ロキのみがやり」(Lawˊ Ki_ ceh_ te ve)、キリスト教徒のラフはやらないという。「ロキ」とは、自分たちのように、「線香を燃やす」(sha tuˊ ve)者たちの意味だと、「焼香者」は説明してくれた⁴⁸。

アユ村の他の村人の話には出てこなかったが、寅年生まれ(調査時に58歳)の男は、八月の行事として、モーバが北の方にあるナシャーナー村に赴き、「オリユベ」(aw_ liˊ yu_ ve)すると話してくれた。「オリユベ」とは、ここでは宗教的に下位の者が、自らが信奉する上位者のところへ赴き、儀礼的な挨拶をして礼を尽くすことだと考えられる。この話は、アユ村が宗教的に、村落を越えたネットワークの中にあることを示唆して興味深いが、そのようなものを示唆する話は他に聞かれなかった。

3.7.8 結婚式

結婚式(aw hpawˊ miˊ ma heuˊ da_ ve, jeh huˊ)は、本来年中行事に入らないかもしれないが、「書記」の義母(80歳)に年中行事について聞くと、彼女は年中祭礼それだけでなく、それらに関連する農業の諸過程とともに順々に紹介してくれた。これはラフ族の伝統的な年中行事が、農業過程と密接な関係をもつことを示しているが、同時に彼女は農曆十月に話が到ると、「このころになったら人々が結婚する」という風に述べた。結婚式はこ

⁴⁷ 他の儀礼と同様に、物を奉獻する行為自体に村人の関心は向いていて、奉獻する対象については、筆者が質問して初めて答えが返ってくる。

⁴⁸ 「ロキ」(Lawˊ Ki_)とは、もともとキリスト教徒ラフが非キリスト教徒を、「異教徒」という意味で呼んだことから、非キリスト教徒のラフ自身もしばしばそう自称するようになったものと思われる。これについては、後述する。

のように農閑期が始まった頃に多くおこなわれるという認識があるようであった。

結婚式は、モーパ (maw^ˈ pa^ˈ.) が司式する。結婚式では、例外的に「点蠟する」(peh^ˈ haw^ˈ tu^ˈ ve)。⁴⁹ 結婚式は昔は夜 (mvuh^ˈ hpeu^ˈ.) にやったが、今では朝の 10 時ごろにやる。結婚式の中心は、豚をつぶして、客たちにご馳走をふるまう (ca^ˈ pi^ˈ ve) ことである。客には「他人の地の人びと」(shu mvuh^ˈ mi^ˈ chaw)、つまり漢族も含まれる⁴⁹。

「カシェ」夫妻によると、結婚式でつぶす豚は、160 キロ必要なので、大きな豚を 4 頭用意しなければならない。「書記」の義母 (80 歳) は、大きな豚 3 頭が必要だと語った。これらの証言は、あるべき結婚式について語ったものと言え、別の機会では「(財産をもっていればもっているなりに、もっていなければもっていないなりにする」と言われたように、実際の結婚式の規模とやり方は様々であるようだ。いずれにせよ、結婚式で新郎が新婦に贈る腕輪等の贈り物や宴会で消費される米、茶、煙草、酒も含めて、すべて新郎側の家族が用意しなければならない。

結婚式では、蠟燭 (peh^ˈ haw^ˈ.) と線香 (sha k'aw) の両方が点される (tu^ˈ ve) が、線香は儀式的あいだずっと、家の「焼香場」(sha tu^ˈ kui^ˈ.) で点されている。一方、蠟燭は儀式的の中心過程で点される。蠟燭は 2 本 (または 4 本)、線香は 10 本用意される⁵⁰。

儀式は、家の「焼香場」(sha tu^ˈ kui^ˈ.) のある部屋 (母屋の入口から入ってすぐの間) でおこなわれる。「焼香場」の前に「ご馳走」(aw^ˈ chi^ˈ ⁵¹) をのせた竹編みの台が一組 (te^ˈ ceh) 並べられる。

そしてモーパが点蠟して、言葉を唱える (aw^ˈ hkaw^ˈ yaw pi^ˈ ve)。この言葉 (aw^ˈ hkaw^ˈ) は、新しい夫婦の安寧と繁栄とを願い求めるものである。

次に、新郎が新婦に、用意した腕輪ひとつ、イヤリング一組、頭に巻く布 (u^ˈ nyi^ˈ)、赤ん坊を背負うための布 (hpi^ˈ hkaw^ˈ) をあげる。そして新郎と新婦は、「焼香場」で「頭を下げる」(o^ˈ k'o^ˈ pui ve、拝礼する)。「焼香者」は、新郎新婦の手首に一本ずつアムケ (a^ˈ mvuh hkeh、糸) を結ぶ⁵²。これが終わると、酒、煙草、ご馳走が出されて、一同の饗宴となる⁵³。

筆者が調査した北タイのラフニ (赤ラフ) と異なり、結婚式は一度だけだと語られた⁵⁴。

⁴⁹ 「他人の地の人びと」とは、他の領域に住む人々、つまり他の民族集団という意味であるが、この文脈では、ハニ族、傣族などよりも、「漢族の地」(Heh^ˈ Pa^ˈ mvuh^ˈ mi^ˈ.) に住む漢族 (Heh^ˈ Pa^ˈ.) を指している。

⁵⁰ この線香は、「森」(heh pui^ˈ hk'aw) から採ってきた材料で、一部の村人が手作りする。村の雑貨店には、この線香が一束 (te^ˈ hka^ˈ) 一元で売っている。

⁵¹ Aw^ˈ chi^ˈ は、ご飯に対する「おかず」とも捉えられるが、主に肉や魚を使った料理を指し、唐辛子ペースト (a^ˈ hpe^ˈ.) や野菜料理は含まない。

⁵² 先述の通り、多くの儀礼過程で見られる「アムケを結ぶ」(a^ˈ mvuh hkeh tcuh^ˈ ve) 行為は、結ばれる者の安寧を祈る意味をもつ。

⁵³ 結婚式に関するここまでの記述は、別記した部分を除き、村の「焼香者」(sha tu^ˈ pa^ˈ.) とモーパに同時に聞いた話にもとづく。

⁵⁴ 北タイのラフニ (赤ラフ) 族では、結婚式には「小さな結婚式の宴」(hkeh^ˈ eh^ˈ、hkeh^ˈ naweh^ˈ.)

しかし、アユ村のある村人が、「(お金が) なければ、鶏をつぶして (少数の人びとにふるまい)、あとで (豚をつぶして) ふるまえばよい」(Maˊcaw, k'o, g'aˊdawˊ leh shaˊ pa nyi ca- piˊ ve ka, hpeh, ve yo.) と言った通り、お金がなければ、鶏をつぶして略式の結婚式をしておき、将来に正式の結婚の宴をすればよいという論理が見られる。この点では、北タイの赤ラフ族の論理と同じものだが、両者においてその制度化・意識化の度合いが異なるのだと言える。また、「カシェ」が語ったように、鶏をつぶした略式の結婚式をし、結局正式な結婚の宴を開かずに済ます者も少なくないようである。

また「他人の地の人びと」も結婚の宴に招くというように、漢族 (Hehˊ Pa-) との関係は大きなものである。結婚式は、いずれの社会においても社会関係の確認や形成の機能をもつが、現在のアユ村の結婚式には、ラフ族の範囲にとどまらない社会関係が表れている。

3.8 不定期におこなわれる祭祀や儀礼

3.8.1 ヤエスズ (子供の誕生祝い)

ヤエ (yaˊ ehˊ) はラフ語で「子供」の意味、スズ (suhˊ zuhˊ) は漢語の「生日」(普通語では sheng1 ri4) をそのまま借りた言葉である。

村滞在 5 日目の夕方、筆者が滞在していた「村公所」の裏の家がなにかと騒がしく、人びとが出たり入ったりしているのが見えた。何かやっているのだろうかと思って行ってみると、家の前の庭に食台を並べて、村人たちがそれを囲んでご馳走を食べていた。筆者も招かれて、そこに座った。

筆者の隣の席の「カシェ」に聞くと、これは「ヤエスズ」というものだと言われた。ラフ語らしくない言葉の響きから、漢語の借用語だとすぐに分かった。「カシェ」はヤエスズは、村人皆がやる訳ではなく、一部人びとでそれをおこなう余裕のある者たちだけがやるものだと教えてくれた。毎年子供が生れて一年経つごとにやる、子供の誕生日祝いである⁵⁵。豚もつぶさないし、線香も燃やさないとのことだった。

テーブルを囲んだ大人たちは、肉料理を食べ、自家蒸留酒、ビール、お茶を飲み、互に煙草を勧めながら、歓談していた。「カシェ」は、この後で誕生日の子供に皆がお祝いに 10 元ずつあげるのだと言った。しばらく経ったところで、各家の世帯主らしい男たちが、現金をそのまま誕生日の子供に渡し始め、子供の方も殆ど無言で受け取っていた。お金を渡した大人も宴会の席に戻り、飲食やおしゃべりを続けていた。

と「大きな結婚式の宴」(hkehˊ lonˊ) とがあり、前者では鶏 2 匹をつぶし、後者では豚をつぶすと、大抵は語られた。

⁵⁵ この日誕生日の子供は男の子だったが、女の子のためにも「ヤエスズ」をするかどうかについては聞かなかった。

人びとが宴会している隣に台が用意され、ケーキが置かれた。ケーキはその日に町から買ってこられたものらしかった。子供の歳の数だけ刺された蠟燭に点火され、人びとが「ハッピーバースデー」の歌を歌い⁵⁶、歌の終わりに子供がケーキの蠟燭を吹き消した。一部の人びとは、「こういうしきたりだ」(aw, li⁵⁵ aw, hk'e⁵⁵ caw, ve)と言って、ケーキのクリームを指で取って、近くに人の顔に塗り合った。

子供が蠟燭を吹き消した後では儀礼らしいものはなかったが、大人たちは残って、料理を食べ、酒、ビール、お茶を飲み、おしゃべりし合った。テレビを観たい者はホスト家族の家の母屋に入って、見始めた。トランプによるギャンブルも始まった。後のほうでは、ホストの家のVCD プレーヤーでのカラオケ（漢語の歌）も始まった。こうして、それぞれが好きなように宴会を夜遅くまで楽しんだ。

ヤエスズは、一見してラフの伝統的な儀礼ではなく、漢族の誕生日祝いを真似たものである。しかし、この翌日の9月1日月曜日の夜には、東崗で誰某のお兄さん(aw, vi⁵⁵ pa, lon⁵⁵)の子供の誕生会があるというので、男女10余人がバイクなどで出かけていった。ラフの伝統儀礼でないとはいえ、アユ村の人びとの生活の中で、ヤエスズは楽しみのひとつになっているようであった。



写真 69 「ヤエスズ」での宴会



写真 70 誕生日の子供がケーキの火を吹き消す



写真 71 ケーキのクリームを塗り合うのがしきたり

⁵⁶ 歌が始まる時に「早く歌おう、早く歌おう」(ha⁵⁵ cha⁵⁵, ha⁵⁵ cha⁵⁵)と囃し立てる声を何人かがあげたが、「歌う」という動詞は、本来のラフ語の k'a⁵⁵（歌う、詠唱する）ではなく、「唱」(chang⁴)の借用だった。単に漢語が借用されているのか、ラフの伝統的な歌と形式の異なる歌であるために、「唱」が使われているのかは不明である。

3.8.2 「功德をなす」

「功德をなす」(bon te ve) と呼ばれる儀礼は、「豚をつぶして功德を乞う」(va, ti^h leh bon law, ve⁵⁷)、「豚をつぶして糸を結ぶ」など、より行為を形容したかたちで表現されることもある。村人の説明ではこの儀礼は、「健康がすぐれない」(ma^h cheh^h sha) の時におこなうものである。北タイの赤ラフ族にも「功德をなす」儀礼があり、病気や不幸の解決および危険の予防の両方の目的でおこなわれる。しかし、アユ村の村人によると、彼らがこの儀礼を、遠くへ旅行に出る時や旅がちなときに、旅中の危険を避けるために、予防的に「功德をもとめる」ことは一般的でないらしい。質問をすれば、将来の危険の回避のためにやることもできるという答えが返ってくるが、実際にやっている人は殆どいない様子であった。

「功德をなす」儀礼にも示される通り、北タイの赤ラフ族および雲南のアユ村のラフ族共に、「功德が大きい」(aw, bon ui, ve) 状態であれば、心身が健康で災厄にも襲われないが、反対の状態だと、心身が不健康で災厄にも見舞われやすい脆弱な状態だと考えている。

3.8.3 「魂を呼び戻す」

心身の不調はしばしば、魂 (aw, ha) が身体から離脱してさまよっていることが理由とされる。そのような際には、「魂を呼び戻す」(aw, ha hku ve) 儀礼がおこなわれる。モーパ (呪医) は、白い糸と黒い糸を用意し、ふたつを並べて言葉を唱える。「白い糸、黒い糸をに従って、それを見ながら、ここへ戻ってこい」(Gu hkehn hpu, gu hkehn na^h hk'a^h suh, nyi-a leh cho hko la^h) という意味の言葉が唱えられる。魂が逃げたとされる者は、家の中にいて、水を入れたコップをもって待っている。最後には、一同が「(魂が) 戻った」(hko, la^h o,) と一緒に大声で唱える。

3.8.4 家のネの祭祀

アユ村の家の中には、正面の戸の上に「レカ」(leh^h ka^h) と呼ばれる、竹を編んだ魔除けが残っているところがあった。この「レカ」は、「家のネの祭祀」(yeh, ne^h te ve) をした跡である。家のネは、家に関する事柄を司る守護的な精霊であるが、時に邪悪となり、家人に災厄を及ぼすことがあると捉えられている。家のネの祭祀については、次項「産前産後の養生と儀礼」を参照されたい。

3.8.5 産前産後の養生と儀礼

ラフ族の間には特有の産後の養生法がある。北タイのラフの間で筆者が見たものは、産後 12 日から 15 日間は産後婦は、火の横に横たわり、鶏肉を食べ続けること、産後 1~3

⁵⁷ 同様に「功德をなす」儀礼をおこなう北タイの赤ラフ族では、「功德を乞う」という表現は主にキリスト教徒の礼拝を指す語として用いられ、「功德をなす」儀礼については用いられない。

ヶ月間は夫婦は性交を慎むべきで⁵⁸、さもなくば産後婦である妻は「ナパク」(na, pa^h ku) という恐ろしい病気になってしまうということだった。アユ村の「書記」の義母(自称 80 歳)は、次のように語ってくれた。

産婦は、出産後 12 日目までは、鶏肉だけを食べる。鶏のうち、白いものは食べてはならず、黒や黄色のものを食べる。白い鶏を食べると、目が見えなくなると言われる。鶏卵は食べてもよい。12 日目以後には、豚肉の赤身を食べてもよい。でも、豚の脂身は食べてはいけない、目が見えなくなると言われるからだ。

産後は、夫婦は一緒に寝てはいけない(性交してはいけない)、1～2 ヶ月間。さもないと女は痩せ細って死んでしまうと言われている。

(筆者はタイでのラフ族調査の経験から、「ナパク (na, pa^h ku) というやつか？」と尋ねた)。そうだ。あんたはナパクも知っているのか。

産後婦は、火の傍に寝ていることはない⁵⁹。今はいい毛布があるから。(産後) 1 ヶ月の間、毛布をしっかりと被って寝ている。1 ヶ月間。それを過ぎると働けるし、料理も作れる。

産後には「レタ」(leh^h ta^h)⁶⁰ を、家の四方に立てる。ネ(ne^h) を追い払うために。産後には「イーチュ」(i^h chu^h、棘のある実) を置く。そうすると(ネに) やられないとさ。モーパ(呪医)でなく、各人がやる、イチュは。モーパがやるのはレタで、言葉も唱える。子供が生れる前にする、家霊の祭祀をするのだ(yeh, ne^h te ve)。子供



写真 72 精霊祭祀の跡 「焼香者」の家の入口上



写真 73 精霊祭祀の跡 正面入口上

⁵⁸ どのくらいの期間禁欲すべきかについての答えは、人によって異なる。

⁵⁹ かつては、自宅分娩した場合には、家の中に新しく小さな囲炉裏を作って火を点し、産後婦はその横に寝て、身体を冷やさないようにして、産後を過ごすことが多かったということである。

⁶⁰ 竹を編んで作った魔除け。タイのラフでも見られる。北タイでは、ラフばかりでなく、他の山地少数民族や低地のタイ人も用いる。前出の「レカ」と同じもの。

が生れる前に、家霊を祀る。唱える言葉については、私はモーバでないので知らない。「ネよ、来るな」とかだろう。産前にすると、安産になると言われる。今はしなくても恐れない。……「医生」(医者)に行く。今では病院で帝王切開することが多い。

家のネの祭祀の時には、線香を燃やす。川から取った砂も撒く。「プエ！、ネよ去れ、ネよ去れ」と言っ。昔からやっていた。ずっと昔には、ヘパ(漢族)がやめろと言ったので止めた。そして今また復活した。ヘパが止めろといったら、止める。ヘパだって「ルミシー」(law[˥] mi[˥] shi[˥]、老迷信)をする。ヘパは、××(役所か?)にいてラフの統治者(jaw[˥] maw[˥])をしている者だってやる、病気になれば。薬を注射しても直らない時には。精霊を祀れば治る。「ヘパの老迷信だ」(Heh[˥] Pa[˥] law[˥] mi[˥] shi[˥])。家のネの祭祀をしないと、難産になる。

(家のネの祭祀は)出産の時だけでなくやる。ネがいれば、いつでもやる。家の戸口の上にこうして(竹を編んだやつを置く)。水牛、牛、豚を飼って、尻尾が切れたら、家霊を祀って、水牛もつぶして食べてしまう。よくないやつなので。豚も。子豚を生んで雌ばかりだと、全部つぶして食べてしまう。森で。一族全部で。そして、家のネの祭祀をする。家のネの祭祀はいつもいる。障らない時にも。ときどき「咬付く」(攻撃してくる)。家のネの祭祀の時には一日でやる。「メ」(meh[˥])とは、悪い死に方をしたもの(霊)だ。口から血を流して死んだり、産褥死とか。それを「メ」と言う。いまはそうたくさんいない。産褥死もなくなったから。家のネの祭祀は産前にする。一緒に「メを叩く」(meh[˥] jaw[˥] ve)。一日に一緒にする。(精霊を追い払うための、小型の)家も作る。病気の時にもやる。

以上で示されるように、アユ村では危機や危機が予想される状況では「家のネの祭祀」がおこなわれるらしい。また「家のネの祭祀」は「メを叩く」儀礼と同日におこなわれると言われる。「メ」とは、事故や殺人などの異常死から生じる邪悪なネである。

北タイの赤ラフ族の間でも、「家のネの祭祀」と「メを叩く」儀礼は、同日におこなわれる。しかし「家のネ」は「家のジョー」(yeh[˥] jaw[˥])と呼ばれ、「家のジョー」は家を守る精霊だとはっきりは言われない。北タイの赤ラフ族においては、家の守護者はグシャであったり、家のネ(yeh[˥] ne[˥])であったり、先祖(chaw suh)であったり、様々に語られる。そして、危機または危機の予想される場面でおこなわれる儀礼は、「家のネの祭祀」でなく、「メを叩く」儀礼と呼ばれ、「メを叩く」儀礼はたいてい「家のネの祭祀」を伴うと言われる。つまり、「家のネの祭祀」と「メを叩く」儀礼のどちらを重要視しているかという点が異なる。アユ村においては「家のネの祭祀」が、北タイの赤ラフ族における「メを叩く」儀礼と同じような位置にあるらしい。

3.9 教えと信仰

聞き取りの中では、宗教的な教えや信仰の対象といったことは、殆ど話題にならなかった。「グシャ」(G'ui, sha)という言葉も、数人から聞かれただけで、それがどういった存在かは問題にならなかった。また、アユ村の宗教と祭祀とは、村落を単位とした村落宗教／村落祭祀と呼ぶべきもので、基本的に、村落を超えた繋がりやネットワークの中にはない。アユ村の宗教と祭祀は、究極的な救済を目的としたものではなく、住民が日常出会う病気、不幸、災難などに対処する具体的な方法の集合である。

アユ村の宗教は、住民が直面する病気や災厄への具体的な対処法を提供しているが、グシャが人間に何を教えているかといった宗教的な教義については、住民との話の中で一度も話題とならなかった。アユ村の宗教は、住民の現世での安寧と繁栄に関わるものであり、形而上学的な観念の発達は見られない。

ある日筆者は「書記」の義母(80歳)に、人間は死んだらどうなるかと聞いてみたところ、「死んだらどうなるか、どこへ行くか分からない」というのが彼女の答えだった。そこで筆者は、死にそうになり、川が見えて、そこで「帰れ」と言われて、甦ったという、日本でしばしば聞く臨死体験の話をしてみた。すると、「そういう話ならば聞いたことがある。死んで、6つの扉があった。6つ目の扉まで行き、それを開かずに、そこに杖(ju' fu)を置いて戻ってきたら、甦った」という話を聞いたことがあると「書記」の義母は言った。「その向こうは死の国(suh mvuh' mi)で、死を司る王(suh jaw' maw')がいるのだ」と彼女は言った。一見して死後観について語っているように見えるこの話は、アユ村住民の形而上学への関心の薄さを示している。筆者が歳を聞いた時などに「書記」の義母は、「もう80歳だ。もう死んでいい。もう十分生きた(cheh' bvuh' o, ve)」と言ったものだった。

3.10 アユ村の宗教と祭祀

章の冒頭で述べた通り、ラフ族宗教の特徴は、至高神崇拝の強調を伴うカリスマ運動の周期的な出現であるが、至高神崇拝の高まりの中で、しばしばカリスマ宗教指導者が村落や民族を超えた広い追従者を獲得する。このような宗教運動は時に低地権力への軍事的な反抗にも繋がることもある。それ程大きな運動とならずとも、自らの中にグシャが具現したと主張するカリスマ指導者の出現は、村落レベルを超えた宗教運動となる傾向にある。

雲南のラフ族でも、例えば瀾滄県糯福郷の南段一帯では、複数の村落がカリスマ的指導者を有する南段の宗教的な支配下にある(筆者による2007年の調査による)。一方、アユ村の宗教と祭祀は、基本的に村落単位のものに留まり、より大きな宗教運動のネットワークの中にはない。このことは、アユ村の住民の至高神グシャに対する認識の弱さに関わっていると言える。

3.11 雲南のキリスト教徒ラフの宗教と祭祀

以上までで、雲南の非キリスト教徒の黒ラフ族の暮らすアユ村における宗教と祭祀について、主に聞き取りをもとに記述して来た。本書の冒頭で述べた通り、雲南のキリスト教徒（バプティスト派）ラフ族の中心地である班利村での調査は出来なかったが、前年 2007 年には、瀾滄拉祜族自治県糯福郷阿里村に属する寨子（自然村）である老邁村にて、聞き取り調査をおこなった。それをもとに、雲南のキリスト教徒ラフ族の宗教と祭祀について短く報告したい⁶¹。

筆者が老邁村に行く前に立ち寄った阿里村は、糯福郷から 17 キロの距離にある村で、地元の言葉では「アーレー」（A⁻ Leh⁻）と呼ばれていた。ラフナ（黒ラフ）、ラフシ（黄ラフ）⁶²、ハニ族の混住村で 30-40 世帯が暮しているという。村委會の書記はハニ族で、その他副書記たちが昼食に同席した。村の人々の生業について聞くと、「小百貨」の商売、水田、茶、松脂で生活しているとのことだった。食事が終わると、この副書記が次の老邁村に案内してくれた。



写真 74 老邁村の様子

老邁村は阿里の「小村」である。「小村」とは「寨子」のことで、「村」よりも小さな単位の集落を指す。一部のラフシ（非キリスト教徒）を除くと、ラフナのキリスト教徒の村で、全部で 70 世帯、350 人が暮しているという。水田は各家にあるが、焼畑はない。これは村が「7 年前に山の高いところから降りてきた」と関係しているらしい。大雨と山すべりのための移住で、家の新築に際しては「政府が援助してくれた」。農作物としては、米を自家消費用に、玉蜀黍を豚の餌にするために栽培している。他には、水牛と牛を飼っており、玉蜀黍や砂糖黍を売るために栽培している。松脂集めも現金を得るための仕事である。若者の「一部は」町に行って働いているということだったが、あとでいろいろ話を聞いていると、その割合は高いようだった。何をしているのかと聞くと、「服務員をしている」という答えである。「服務員とは一体なにをやっているのだ」と聞いても、「服務員」の繰り返しである。村内に学校はなく、子供たちは阿里の小学校に行くが、「初中」（中学）

⁶¹ 本節の写真全ては 2007 年年 8 月 31 日に老邁村にて筆者が撮影したものである。

⁶² ラフナとは「黒いラフ」、ラフシとは「黄色いラフ」という意味で、どちらもラフ族の下位集団である。中国のラフ族の多くは「ラフナ」か「ラフシ」であり、タイやビルマに見られる「ラフニ」（赤いラフ）は中国にはいない。



写真 75 老邁基督教堂へ上る道



写真 76 老邁基督教堂



写真 77 老邁基督教堂の内部



写真 78 教会に掲げられた「宗教活動場所登記証」



写真 79 教会内の中国語による掲示

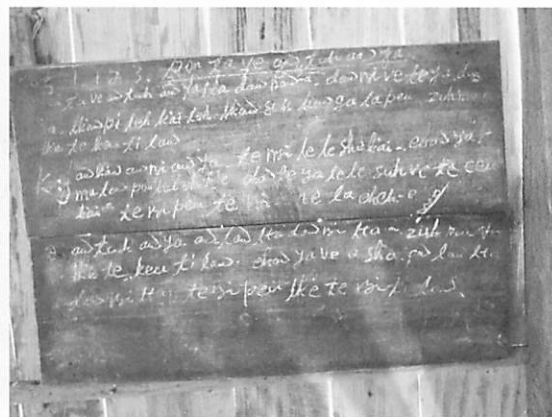


写真 80 教会で使われるラフ文字

は、糯福に寄宿して通わなければならない。「高中」(高校)以降は瀾滄(勐朗)に行かなければならない。あとで話を聞いた「サラマ」(31歳)の娘のひとは糯福で勉強しているが、お金がかかって仕方ないということだった。

案内してくれた阿里村委會の副書記のラフシの男によれば、阿里村の寨子のうちキリスト教徒はこの村だけで、他のラフナ、ラフシはキリスト教徒でない。老邁村の人々は、1980年「改革開放」の時に、「キリスト教を始めた」。それ以前は「何もやっていず」(te, chiˊ maˊ

te)、病気の時には「薬を飲んでいた」(na^ˆ tsuh^ˆ daw^ˆ ve)。この(宗教面で)「何もしていなかった」という答えは、他の場所でも聞いたが、集団化の時代に民族宗教が弾圧されたことがあったとしても、本当に宗教的なことは「何もしていなかった」ののだろうかという疑問が残る。改革開放後に、民族の文化と宗教とが復活していることから、集団化の時代は全くの宗教的な断絶でなく、ある程度宗教的な実践はあったのではないだろうかと思わせる。

村の外れの高台、入口の道路の反対側の高台には教会(「老邁基督教堂」)があった。暑い日だったが、歩いて登って見にいった。中を覗くと、正面の説教台やらポスターのある脇に、黒板がかけられていた。黒板にある文字はローマ字を用いたラフ語表記であるが(ただし声調記号は省略されていた)、1950年代に中国政府が作ったものではなく、バプティスト宣教師が20世紀初めに案出した表記法だった。このバプティスト文字は、タイやビルマのキリスト教徒ラフが使っている。

教会の入口横には「雲南省民族宗教管理規定(1997)、宗教活動場所管理条例(1994)」が貼られており、内部正面には「宗教活動場所登記証(2003.06.30)」が掛けられていた。中国では宗教場所にはこれらが掲げられていなければならない。

村に戻って、村の雑貨店で休んでいて、たまたまやってきた女性に話しかけたら、「サラマ」(「先生の妻」という意味、31歳)だったので、話を聞いた。老邁村はバプティストの村で、洗礼の際には全身を水に浸すやり方をとる。サラマ自身は15歳の時に洗礼を受けた。子供の頃は父が病気だったため、政府の学校には3年しか行かなかった。ラフ文字は政府の「課本」(教科書)で勉強したという。タイのキリスト教徒ラフの間でも、司牧者の資質のひとつはラフ語の識字技能をもっていることだが、ここでも同じらしい。中国では少数民族語による教科書が作られているが、彼女はそれを教科書としてラフ語識字を学んだのである。

村教会には、「ボコウ」(bon kaw^ˆ、牧師)と「メコウ」(meh kaw^ˆ、牧師夫人)、「先生」(sa^ˆ la^ˆ)と「先生夫人」(sa^ˆ la^ˆ ma)がいる。牧師と牧師夫人の役割は、「宗教を教えること」で、「先生」と「先生夫人」の役割は、「(ラフ)文字を教える」ことだそう⁶³。他には、教会婦人部会と教会青年部会があり、それぞれ婦人部会長と青年部会長がいる。青年部会には男10人、女10人の20人のメンバーがいるという。

礼拝は週に一度日曜日に4回おこなわれる。朝の礼拝は「8時から」始まり、「病気などにならないように」と祈る。婦人会の礼拝は「12時から」始まる。メインの礼拝は午後「3時に」始まる。青年部の礼拝は午後「5時から」始まる。

朝の礼拝は、「賛美歌を歌う」→「祈る」→「ラフ文字を学ぶ」の後、「それぞれに歌を

⁶³ 「ボコウ」「メコウ」という言い方は、タイのキリスト教徒ラフの間では聞かれない。タイでは村牧師は「サラ」(先生)である。日曜学校でラフ文字を教える者は、村牧師と同一である場合もあるし、別の人物である場合もある。後者もたいがいは「サラ」と呼ばれるが、区別を示す場合には、「日曜学校で教える」(Sunday School ma^ˆ pa^ˆ)という限定がつけられる。

歌う」と進んで終わる。献金を集めることはしない。

婦人部会の礼拝は、「献金する」→「ラフ文字を学ぶ」→「賛美歌」→「祈る」と進む。

全体の礼拝は3時から始まり、1時間余りかかる。「祈る」→「賛美歌」→「献金」→「ラフ文字を教える」→「祈る」→「賛美歌」と進む。

青年部会の礼拝は、青年部会長が司式し、同様に進行するという。

ここで特徴的なのは、ラフ語の識字教育が各礼拝時の一部に組み込まれていることである。タイやビルマのキリスト教徒ラフ（バプティスト）のあいだでは、日曜学校 *Sunday school* として、土曜日や日曜日に別に時間と場所を取って、ラフ文字の教授が行なわれている。

主要年中行事について尋ねると、「サラマ」は（1）クリスマス、（2）聖餐、（3）新米祭を挙げた。新年祭はどうするかと聞くと、「キリスト教徒の新年祭」(*bon yaˊ hk'aw, caˊ ve*) は12月25日だという答えだった。最も重要な年中行事という意味なのだろうが、クリスマスが「新年祭」に比されているのが興味深い。豚をつぶして、昼間に「祈祷」した後で、豚肉料理を食べる。夜にはクリスマスの寸劇が演じられる。12月25日の3-4日前からは、聖歌隊が回る。ギター伴奏で、キリスト誕生についての歌を歌い、一軒一軒を回る。他の村にも行く。訪ねた家からは、お菓子とお金が供されるが、額は10-20元から、時には100元払われることもある。

3月から4月にかけて、聖餐式が行なわれる。聖餐を行なう資格のある「サラロー」(*sa-la, lonˊ*、「大先生」の意味)が、樞福からやってくる。葡萄ジュースを飲み、「お菓子」(パンのことか)のかけらを口にする。

新米祭は、「(ラフの暦、つまり農暦)の8月15日に行なわれる。村内には黄ラフ(*Laˊ Hu shi*)の「異教徒」(非キリスト教徒)も10軒ほどいるが、同日に一緒に行なう。キリスト教徒は皆サラ(または牧師?)の家に来て一緒に食べるが、各家でも食べる。他村の人々も遊びに来る。新米(梗米)を炊いて食べるが、これはタイのキリスト教徒ラフも同じである⁶⁴。

復活祭には特に行事はない。ただ3月の復活祭近くの礼拝時には、イエスが復活したという歌が歌われる。

定期行事の他に、村人の病気が長引いたときなどには、「家での祈祷会」が催されることもある。「家での祈祷会」では、ホストが豚をつぶして、料理を作り、村の人々にご馳走する。豚がなければ、水とお菓子でもてなす。「祈る」(聖書を読む、歌を歌う、祈るから成る)→「食べる」(共食)→握手→「歌を歌う」という手順で進む。このようにして病気の主催者は、「功德を求める」(*aw, bon ca ve*)のだという。他人の物を盗んだり、浮気をしたりすると、「罪」(*venˊ baˊ*)になる。「功德をなす」(*bon te ve*)ことによって、「罪をな

⁶⁴ 一方、タイの赤ラフ族は、新米の穂を入れて古米を蒸して食べる。

くす」と、病気も治るのだという⁶⁵。主催者から司式者にお金が払われるが、額は4元ぐらいからである。そのお金は教会の費用となり、牧師などが教会センターなどに研修に行く際の費用などにあてられるので、司式者自身は儀礼でまったくお金を貰うことはないそうである。

タイのキリスト教徒ラフと同様に、父母に対して不義理や不孝を行うと、やがて病気などの災厄に見舞われるという観念は、中国のキリスト教徒ラフのあいだでも共有されているようである。サラマも「父母に対して罪があると病気になる、父母の手を水で洗ってやると治る」と言った。他人の手に水をかけて儀礼的に洗ってやる行為には、相手に対する表敬の意味がある。

タイのラフの間では、親に対する過ちを贖うために、「ケプチェヴェ」(hkeh hpeu^h che^h ve)という、さらに大掛かりな儀礼が行われることもある。親が着ている上着で水を濾し、その濁った水を飲むというものである。ここではやらないかと聞いてみたが、サラマの答えは、そんな「異教徒のやり方は、知らない」というものだった。同様の答えは、タイのキリスト教徒ラフからもしばしば聞かれるが、現実には違う場合も少なくない。

ネ(精霊)に対しては、山のネ(hk'aw, ne^h)でも川のネ(i' ka^h ne^h)でもト(taw^h、妖術霊)でも、(神やキリストに)「祈る」だけ(で、精霊祭祀することはない)という公式の答えが聞かれた。これも同様に、実際の状況をどれだけ反映しているかわからない。

中国のラフ教会の中心地は、瀾滄

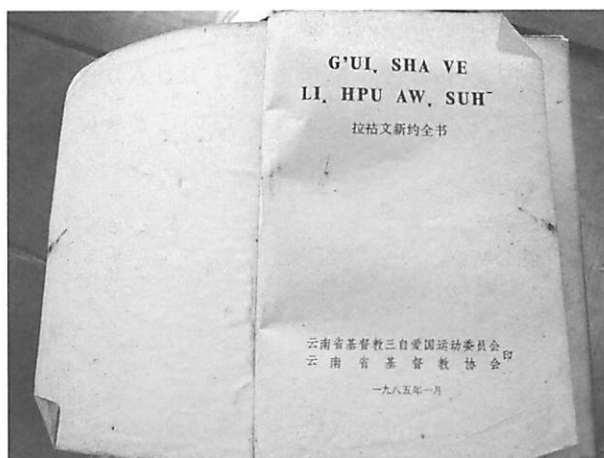


写真 81 ラフ語の新約聖書

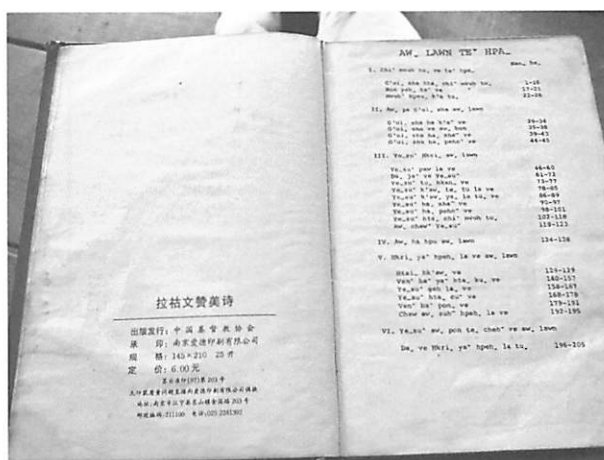


写真 82 ラフ語の賛美歌集

⁶⁵ 儀礼としての「家での祈祷会」の構造は、非キリスト教徒ラフの「功德をなす」(bon te ve)儀礼と同一である。罪、病気治癒、積徳による罪の浄化を軸とした、この「サラマ」の説明もまた、非キリスト教徒ラフの「功德をなす」儀礼についての説明と軌を一にしている。キリスト教徒ラフはしばしば「神に力を借りるため」といった、より抽象的で公的な説明を行うこともあるので、「サラマ」のこの説明を聞いて、その直截さは印象に残った。

と孟連のあいだの山中にあるパーリ（班利村）である。そこには、聖書学校があり、自分たちも一年に 1-2 回研修に行くと「サ라마」は語った。教会のリーダーは「石有福」だったが、しばらく前に「ジャロー」（Ca. Law）という者に代わった。「ジャロー」はラフ名だが、その中国名は知らないと言った。

ひと通りの話を終えて、サ라마にラフ語の聖書と讃美歌集とを見せてもらった。どちらもタイやビルマのキリスト教徒ラフが使っているものと同じだったが、印刷地が中国である点が異なっていた。中国で印刷する方が安いらしい。

2007 年 8 月に糯福郷の町にいた人々に聞いたことだが、糯福郷の南には黄ラフが多く、北には黒ラフが多く住んでいるという。そのうち、黒ラフの方にキリスト教徒が多く、黄ラフには少ない。そして、黄ラフ人は、キリスト教徒になったものでも、酒を飲んだりしているという話だった。筆者が訪れることができた狭い範囲でも、同じ印象を受けた。黄ラフのキリスト教徒に飲酒したりする人が多いという話は、黄ラフのキリスト教徒の間にキリスト教があまり根付いていないことを示すと考えられる。